

シンポジウム 科学映画のこれまでとこれから

いのちの科学映像が 切り拓くもの

▶ アイカムの 50 年の足跡から考える ◀



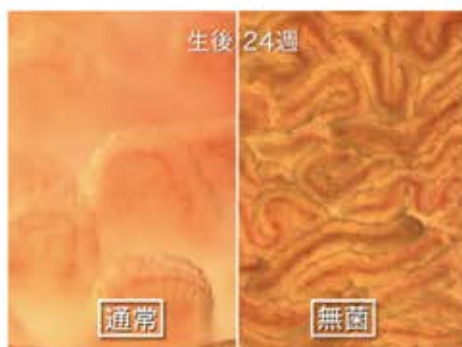
2022 年 **11 月 23 日** (水・祝) 13:00-17:00 (12:30 開場)

アカデミー文京学習室 (文京シビックセンター地下 1 階北側)

東京メトロ丸ノ内線・南北線後楽園駅直結、都営地下鉄三田線・大江戸線春日駅直結

- 当日会場にて受付けますが、できるだけ事前に[申し込みフォーム](#)にご記入ください (定員 60 名) (フォームは市民科学研究室ウェブサイトにあります)
- 資料代: 1500 円 (学生は 1000 円)
- お問合せ: 市民科学研究室 03-5834-8328

renraku@shiminkagaku.org



太田正雄

1. **アイカム生命映像の特質と意義** [25 分]
上田昌文 (NPO 法人市民科学研究室・代表理事)
2. **アイカムの歩みをふりかえる** [30 分]
川村智子 (株式会社アイカム・代表取締役社長)
3. **映画上映** [30 分+32 分+他に短編 2 本]
『共生のはじまり』 (2011 年)
『医真菌学の歴史を訪ねて-太田正雄と真菌研究』 (1996 年)
4. **専門家を交えての議論** [上記 2 名を加えて、40 分]
細野朗 (日本大学生物資源科学部教授)
山口英世 (帝京大学名誉教授)
松井毅 (東京工科大学応用生物学部教授)
武田純一郎 (株式会社アイカム・代表取締役会長)
5. **会場参加者を交えての質疑応答・議論** [40 分]

映像によって「科学」をどう伝えるか—これまでの科学映画の多くがこの意図のもとに制作され、享受されてきたが、CG (コンピュータ・グラフィック) 技術があたりまえになった現在、TV 科学番組が科学映画をなきものにしてしまったようにも見える。しかしそれは本当か。実写でしかとらえられない「いのち」の姿を追いつけてきたアイカムは、研究者との協同により「生きている姿」を可視化することで、新たな科学的発見をも生み出し、その映像作品の哲学的な深みや美しさも相まって、世界的評価を受けてきた。今後の生命科学研究において映像の持つ意義・可能性にも目を向けて、アイカムの 50 年の歩みをふりかえりつつ、科学映画のこれからを考える。

共催: NPO 法人市民科学研究室 株式会社アイカム

シンポジウム当日の記録より

●アイカムの生命映像の特質と意義 上田昌文

アイカムの仕事は、高度な撮影技術を活かし、生命現象を探索していく。長期間にわたる微速度撮影で細胞の変化を見せていく。研究者と話し合い、啓発し合いながら企画し運営していく体制や力を持っていることがすごい。その結果「誰もみたことのないもの」を見せて、新発見とか新しい検証を導いていく。

●アイカムの歩みをふりかえる 川村智子

私たちはいのちの科学映像を撮っている。生命、生体の中の世界「なんて、いのちは美しいんだろう」と感じられる。細胞培養や顕微鏡撮影技術の駆使はもちろん、一方で、物語性を大事にしている。それが私たちの映画作りの原点。専門家向けとともに子ども達にもいのちの映像を体験してもらいたい。

●専門家を交えての議論

山口英世（帝京大学 名誉教授）

生き物を本当に理解するには、生きたままの状態を観察するほかない。真菌感染症の動物モデルにおける病原体と生体とのダイナミックな相互作用を見事にとらえた動画は、研究はもちろん、医学生の教育にも大変役立つ。本物の真菌やその動く映像に触れ、学問の歴史を知ってもらうことが将来の研究者や理解者を作る。そういう映像制作を支援するための組織が欲しい。

細野朗（日本大学 生物資源科学部教授）

ものすごい技術力だなと感動し、ワクワクしながら、こんなことができたらいいなと会合を重ねて、社会にどう還元できるだろうか考えた。CGは分かりやすさに繋がるが、やはり実際、アイカムが取り組んでいた、生体の中で起きている部分の映像はまったく説得力が違う。

松井毅（東京工科大学 応用生物学部教授）

日常的に研究のデータとして動画撮影し、画像から軌道変化・形状変化を解析して、皮膚の進化研究に生かしている。動画でみないと本当の解明はできない。学生には学ぶ対象のイメージを持ってもらうことが大事だ。動画で本当の動きを見ることで理解度が全然違ってくる。教育には映像をぜひ活用したい。バーチャルな場を作っているいろんな意見を言う場があってもいいのかな。今度こういうものを撮っていくというふうに進めてくのはどうか。

武田純一郎（株式会社アイカム・代表取締役会長）

先生方の思い、見たいもの、目的を聞いて、細胞やマウスなどはたくさん扱ってきたので、そこでお手伝いできるかどうか。現場は、どうやったら撮れるだろうということを一生涯懸命考える。

